

「涙の味」

私が高校生の頃でした。2年生の初夏の頃、私たちはいつものように早弁をしようと、級友数人で屋上に上がりました。その日はどこまでも青く晴れ渡り、北の遠くの青い山がくっきりと見え、初夏の風が優しく私たちを包んでくれていました。

私は満ち足りた顔をし、新聞紙に包んだアルミの弁当を取り出してみると、どうもいつもの弁当箱と違い、ひと回り小さいのに気が付きました。朝早く慌てて出てきたものだから、母の弁当と取り違えてしまったらしい。「仕方がない。足りなければ、売店でパンでも買おう」と思い、ふたを開けて驚きました。

当時、母は父と死に別れ、女で一つで私と弟を育てていました。決して豊かな暮らしではありません。しかし、私の弁当はいつも卵焼きや魚の切り身や鶏の唐揚げなどがしっかりと入っていました。

当然、母の弁当にも同じものが入っているものだと思っていましたが、母の弁当には、ご飯とほんの数片の味噌漬けだけでした。それを見た瞬間、私は全てを知り、母への感謝の気持で涙が溢れてきました。

私はもう弁当が食べられず、級友に涙を隠し、いそいそと屋上から降りて教室近くの手洗い場で顔をゴシゴシと力を入れて洗い、次の授業を受けました。

それから、もう早弁はできませんでした。あの時のしょっぱかった涙の味が私のそれからの過ごし方を変えてしまったからです。今でも、時々懐かしく思い出されます。

「ある会社員の高校時代の思い出」より～

今月は、いろんな意味で“旅立ち”の春となられる方も、その旅立ちを見送ったり、応援したりする立場の方もたくさんいらっしゃる季節です。4月より“弁当”を持って登校や出勤を始められる方と同じ数の～その弁当を作り始めるお母さん～奥様もいらっしゃるのではないのでしょうか？

私もまだまだ気分は若いつもりでも、学生時代を思い出すには三十数年もの月日を、振り返らなければならない年となりました。でも、この文を読みながら一瞬で学生時代の、甘酸っぱいというか、なぜか切ないような感覚がよみがえりました！！

高校時代、私も母より毎日弁当を作ってもらっていました。母も仕事をしており大変だったろうなと思いますが～その頃は、弁当を作ってもらうことは、さも「当たり前」と言わんばかりに・・・「もっと肉を入れといて～」「汁がにじまんようにつめて」とか言っていた記憶が頭に浮かび恥ずかしく思います。

先日、ある方の講演会で「ありがとう」の反対の言葉は「当たり前」だと教わりました！！毎日弁当を作ってもらっている事～勉強できる事～歩ける事～太陽の光を浴びれる事～話せる事～などなどついつい「当たり前」と思って過ごしている事を、「ありがたい」と感謝して過ごせるようになれば、どんなにすばらしい毎日が送れるだろうと思います。

まずは、一番身近にいる人に、事あるごとに「ありがとう」と言うことを習慣づけるところから始めましょう！！

P.S.

現在、私たち夫婦はご存知の方も多いと思いますが、お互いキュート「玉名店」と「植木店」に分かれて仕事をしています。つまり、共働きなのですが、食事の用意も掃除洗濯も全部、妻がやっています。女は偉い！！母は強い！！とばかり言わず少しは私も手伝わないと“バチ”が当たる気がします。

でも手伝うと「邪魔！！」「せんでよか！！」「雨が降るからやめて！！」とか言われそうなのでせめて今まで以上に「ありがとう」の言葉を多めにしよう！！

「ありがとう！～ありがとう！　ありがとう！～ありがとうございます！！」

